

左側に置くのであります。又茶汁その他何にても食する毎に飯を食することは忘れてはなりません。香の物は湯茶をつけてからと、湯茶の時に食します。箸先は多く濡らす。食する時成るべく静かにして音立てぬやうにし、食し終りましたら箸先は鼻紙で拭いて納めるものであります。干菓子は指尖で摘んで食し、蒸菓子は楊子又は箸で食します。茶は茶臺に載せたのは兩手で取り上げて飲み、茶碗のは左の手に茶托を載せたまゝで、右の手に茶碗を取り上げて飲むのであります。本膳の薦撤のときは必らず禮を施さねばなりません。

洋食の宴

西洋風の立禮要膳を供ふるには、まづ接待員をして、それく食卓へ客の配置をかねて番附又は口頭で申し通じて置き、食卓の用意が整ひましたら客を引いて、定め席へ着かせるのであります。食卓へは白布を敷き、盛花、菓子、果物、香料其の他の品を配置よく供へ、客の銘々の前には食刀、肉刺、食匙の類、卓布、献立書、麵包及び姓名書等供へ、そして客の着席を待ちます。大要にはスープを出す前に乾麵包、刺麵包の類を供へ、鹽魚干魚、乾肉又は各種の漬物等、すべて食慾を催すべき種々の食品少量を薦め、然る後一

旦残りの麵包其の他を撤き、さてスープ二種を出すのであります。普通はスープ二種を出し、そして魚肉、鳥獸肉、野菜、サラダ、蒸物の類、菓子果物を薦め、酒も町噺なのは各種の銘酒を薦め、普通は一二種若くは三種位を薦めます。その他飲物には礦水、レモナード、サイダー及び水等を薦めます。但し葡萄酒類は長めの酒盃に、銘酒は小盃に、シャンペン酒は平たき形の盃を用意します。乾盃として、主人及び客のために挙ぐる祝盃はシャンペン酒を普通とするのであります。大要には銘酒の多き且つ美なるを以て誇りとするのであります。禁酒會員等は寧ろ一切の酒類を退けて水に代へた例も稀にはあります。主人夫婦は食卓の中央に坐を定め、主人の右側に第一席の女客、左側に第二席の女客、主婦の右側に第一席の男客、左側に第二席の男客、次に女客、次に男客と云ふやうに席次を定めるが普通であります。さて席が定まりましたら、主人主婦はまづ食事を始め、大抵客の食し終る頃、主人主婦食卓を離れて客室に導き、男客は喫煙室に入ります。若し喫煙室の設けのないときは、女客が客室に立つた後に、男客は残つて喫煙するのであります。(食卓の配置は圖に示します)食後の珈琲紅茶は客室に客が戻つてから出します。然し便宜上食卓の上で出しても苦しくありません。

配膳人は大抵ボーイと呼び習はして居りますから、此處にもまづボーイとして述べますボーイは常に客の後部程よい所に立たせて置き、食物を順序よく、客を待たさぬやうに敏活に配り酒、水等の飲物も注意して常に盃に満たさしめ、飲物は客の右側より、食物は客の左側より薦進させます。客が若し過つて食刀、肉刺等を取り落しましたら、直に代り上げて、落ちたの



を拾つて置くなど、すべて能く心を附けなければなりません。そして用事を伺ふにも、成るべく小聲で言ひ、決して各自談話を始めぬものであります。食物を盛つて客に取らせる大皿は、この中の品の客に取り易きやうにし、取り難き物は取りよきやうに切り、又は揚つて置いて参らすものであります。ボーイの服は正服、正服無きは燕尾服を本儀とし、略した時も清潔にして禮儀正しいものを着用させなければなりません。立禮食事に臨んだ客は、まづ主人が食堂を開く通知を得て、導かれた時、男子の來りて腕を援けられ、軽く左の手でその腕に凭り、設けの椅子に凭る時一寸目禮するのであります。勿論我が國では餘程正式の時でなければ、一々男子が女子を引くことは致しません。さて食卓に就いて、主人方の食事を始めらるゝを見て、自分も食事を始める時（洋装なれば手袋を脱る）卓布を取つて膝にかけます。卓布は胸より高くかけるは下品であります。日本服などは帯から、洋装でもその邊りから掛けるが宜しい。食事の終つた時は大きく曇み、それを掻き拭きやうにして卓上に置きます。食刀肉刺その他何でも、皿に觸れて音立てぬやう、スプンなど吸ふ音の聞えぬやう靜かにして、しかも餘り愚圖々々せぬやうに食するを宜しとしなす。談話は常に成るべく席の

接した人同志とすべく、それも餘り高聲で他の耳障りとならぬやうに、又私語はせぬやう注意すべきであります。鳥獸肉は、食刀肉刺を左右の手に持つて、切りながら食するを普通とし、魚肉野菜の類は肉刺を右の手に持ち、左の手に麵包の小片を持つて、あしらひながら食するを普通とし交す。但しアスバラガスは手で持つて食します。麵包は食刀で切らず手で扱ふものであります。嗽の水は女子は殊に果物を食した後、指先のみを入れて洗ふに止め、指先は食布で拭きます。小椅子も女子は食卓の所では使はぬものであります。酒は始め一度は注がる、儘にして置いて宜しいが、場合により其れも断つて宜しい。但しシヤンペン酒は乾盃に要するものですから、飲まずとも注がして置いて宜しい。すべて嫌ひな物は取らぬが宜しい。又ボーイの薦むるのを謝絶する時は、軽く右の手を舉げれば、ボーイは大抵諒して退くものであります。又軽く一寸顔を振つても宜しい。女子は成るべく酒は飲まぬを良しとします。肉でも果物でも少しづつ、切つて食すべく、皮を剥いたり切つたりして、皿の中に残して置くのは不體裁であります。珈琲を出さるゝ時に酒を添へらるゝ事があります。この種の酒は極めて強いものでありますから、これは決して女子は手に觸れぬが宜しい。

さて人々の食卓を離れる折、男子に引かれた時は、又舊の如く男子によつて客室まで伴はれ、一禮して「有難う」など、挨拶すべきであります。各自の前に供へてある献立書、姓名書は必ず持ち歸るのであります。又小さい花束、或は記念品などを供せられた時は、勿論持ち歸るのであります。

夜會は食事を主とするものでありませんから、夜會の立食には、一體は女子の爲めにも一々椅子の設けはせずとも宜しいのであります。椅子の不足は誠に混雜して困るものでもありますから、能ふべきだけ多く備ふるが便利であります。夜會には大抵多人數招くが普通でありますから、主人からは殊に出入及び會場の整理、接待に手の届くやう注意すべきであります。多人數集つてゐる會場は、冬でも蒸し暑さを感じる事があるものですから、暖氣の節は殊に注意して、戸や窓を成るべく開け放すやうにし、冷たい飲料の用意が肝要であります。又少しでも気分悪く感ずる人がありましたならば、速かに空氣のよい別室に伴うて、身體をくつろげなどして休息せしめます。

食堂は大卓に盛花、飾り菓子、果物、飲食物を並べ、皿、食刀、肉刺その他一切の用意を整へ、好き時刻に客を誘うて、まづ皿を配り、次に飲食品を薦めるのであります。そし

て女客には成るべく椅子を興へ、飲食品を供するも、男客はその取らるゝに任せて宜しい。

夜會の客の出入、殊に返りは最も混雜し易いものでありますから、始めから接待員の配置を良くして、成るべく混雜を防ぎ、客に不快の念を感せしめぬやうにすべきであります。

舞踏の催しは單略にと思つても却々説き盡されませんから茲には省くことゝします。夜會に招かれて臨席するには、まづ定時に行くが宜しいが、食事よりは少しは早くても遅くても宜しい。矢張り引接の主人方に挨拶して會場に赴き、適宜の談話又は設けの娛樂によつて主人の好意を悦び謝する心で、不快の顔色や言行を表はさぬことは前に述べました客の心得と格別變ることはありません。食堂へ導かれて用意の饗應を快く受くべきも、夜會は食事が主でありませぬから、食ひて飲食し、又は卓上の花などを濫りに持ち還るなどは男子でも爲すまじきことでありますから、女子は殊に注意し、苟且にも右様の非禮な振舞をしてはなりません。夜會の退散は大抵深更に及ぶものでありますから、上席の客が還られましたらば、成るべく速かに還る分が宜しい。多人數混雜の出入には殊に注意して

過ちのないやうにし、主人にも心配をかけぬやう心掛くべきであります。夜會の服装は、まづ夜食の服装に準じて宜しい。

園遊會は、夜會の心得と大抵似よりのものと思ふて宜しい。たゞ園遊會は、室外に於て催すものでありますから、主人方の用意も夜會とは多少趣を異にするべきは勿論であります。園遊會はまづ大抵は春秋など氣候の好い時に催すもので、來客の興を助くる爲めに模擬店(館、團子、菓子、果物、蕎麥、おでん及び茶など)その他種々の趣向があり、又は手品、音楽などさまざまの餘興を適宜に催すも宜しい。そして來客が成るべく氣散じに款を盡すやうにとの注意の行届くが肝要であります。園遊會にも大抵四時頃に至りて立食を供するが普通であります。

園遊會の招待を受けて來會する者の作法心得等も、矢張り夜會と格別異なることもありませんが、衣服は夜會より略式で宜しい。一體から云へば小紋々附であります。縞物でも非禮ではありませんけれども、今は高貴の方々の集はるゝ園遊會などには、白襟紋附さへも着用する人がある程ですから、小紋々附又は對無垢の紋附或は異り裏などを用ふるを普通とします。即ち洋装なれば訪問服を着用するので、それに適當するは小紋々附くらの

處でありませう。洋装では帽子を被り、外套も襟巻も取るに及びませぬが、日本服ならば來會して主人方に挨拶する時、又は長上の人に引き遇ひての禮には襟巻は脱るべく、外套はまづ始終着ぬが宜いでせう、その他の禮は大抵夜會の時に準じて宜しい。

旅行

旅行は他の事よりも禮儀を略するものでありますから、衣服でも旅行着と云へば、略服にしてあるやうなもので、まづ禮としては單略なのであります。然し近來は外國の人も旅行し、又外國へも旅行することですから、此處にも先づ一通りの注意作法を述べませう。旅客を迎ふる方の心得は、まづ客人の疲勞を思ひ遣り、殊に遠來の人に對しては、馴れの氣候の變化に障らぬやう、その他飲食物等にも相違のあるべきを考へて、親切に取扱ひすべての容の「ノリ」よりも心の「ノリ」を專一とすべきであります。

故に定めの場合へ出て、旅客を迎へましたらば、十分同情を寄せて丁寧の言辭、親切の行爲を以てすべきも、餘りに長き談話、重々しい禮儀を盡して、先方の疲勞を増さしめぬやうにすべく、況して我が家に迎ふる客の如きは、大抵の事は翌日にして早く入浴せしめ

速かに食事せしめ、寢所に安靜にして緩々と睡眠せしむるが主人方の旅客に對する唯一の禮であります。又客に參らする寢衣、夜具などは物は龜末であつても、汚れたり皺ついたりして、客の心地悪しく感せぬやうにとの注意が肝要であります。そして何よりも家内一同の同情深く、機嫌よく、隔意なき取扱ひが最も長途の疲れある旅客に對しては、殊に愉快を感ずるもので、それが即ち心の「ノリ」に適へる仕方であります。

又暫らく滞在せらるゝ客に對しては、能ふだけ家内の紛紜等を聞かせぬ様にし、安心して宿泊せしむるやうにしなければなりませぬ。そして毎日大抵客の心の儘に休息をもし、用事を足す時間を十分與ふるが宜しい。いか程親切に待遇すが宜いとして、始終附き切りで、客に窮屈を感せしめるやうの事があつてはなりません。かうして其の間に折々茶菓を薦め、談話を試み、又は友人への訪問、名所古蹟の散策に同伴する等、すべて客の心に満足して且つ疲勞を感せぬ程度にすべきであります。

又何の關係もない旅人が、自分の町村を過ぎる時、或は道を問ひ又は湯茶を請はるゝ時等の作法及び注意も一通り述べませう。

道を過ぎる旅人が、いか程龜末の服装をして居ても、又いか様に可笑しい様子でありま

しても、決してそれを輕蔑し或は嘲り笑ひ、罵りなどしてはなりません。そればかりでなく子供などが右様の振舞をした時には、よく／＼其の不心得を諷してさすね様にし、又旅人が道を尋ねなどしましたら丁寧親切に教へてやらねばなりません。然し見知らぬ人が紹介もなしに来て、宿泊を求めた時は、これは謝絶するが宜しい。

如何なる人がいか様の心を以て人の家に入り込まうとするも知れず、又それ程でないにしましても、婦人は殊更に慎みの爲めにも謝絶して宜しい。況して男客であつたならば、見知り越しの人でも、近親又は格別の懸念の人でなければ宿泊せしめぬ方が宜しい。但し主人の指揮で泊める時は此の限りでないのみならず、よく丁寧にすべきは勿論であります。湯茶を請はるゝ時などは、成るべく遣はすが宜しいが、それも善からぬ人が家内の様子を探るために立ち寄る等の事があつてはなりませんから、よく／＼注意して取扱ふべきであります。

旅をするには、まづ氣候、土地、人情その他の事も全く知らぬ所、或は馴れぬ所へ行くのでありますから、能く注意すべきは勿論、「その國に入つては其の國禁をいふ」と古人も云はれた通り、自國では禮とした事も他國では非禮とすることがあり、他國では非禮とす

ることも、自國では禮とすることもあるものですから、異なる國に旅したならば、能くその土地の人又はその様子を知らぬ同伴者などを尋ねて、その國人の非禮と感せぬやう心すべく、又は自分には非禮だと感じた時でも、能く風俗習慣を聞いた上でなければ濫りに咎め立てなどしてはなりません。

知人の家に宿泊したならば、成るべく家人に餘計な手をかけぬやうにし、身の廻りその他の物も、そつと自分で成るべく始末し、久しく宿泊するならば、夜具の始末は勿論居室の掃除等もし、能ふべきことは家人の手傳ひもするが宜しい。が、然し餘り内部に立ち入つて、先方に迷惑を感せしめ、又は心苦しい思ひをさせる等のことなく、家事は殊に見ぬ振り聞かぬ振りにして、其處を立つた後も濫りに其の家の事を他に語る等のことのないやうにし、自分の使用品は成るべく自分の物を以てするやうにしなければなりません。但し石使が餘多ある家などでは、寧ろ却つて餘りに家事に手出しをせぬ方が宜しい。これが宿泊者の家人に對する禮儀であります。

旅館は自分が金圓を支拂つて宿泊する所でありますから、大抵は自分の勝手にして宜い譯ではあります。が、旅館として自分一人の占領ではなく、必ず相客があるとしませば、そ

の相客に對しての禮儀がなければなりません。相客へ對する禮は餘りに高聲で話し、高く笑ひ、四邊騒がしい遊戯などは、女子は殊に慎みてせぬもの、況して深更に及んでは一層注意して靜肅にせねばなりません。又相客同志も餘りに打ち解けた交際は、女子は殊更に慎むべきも、さりごと先方より挨拶せられた時、無愛想な様子や、高振つた舉動は甚だ無禮でありますからしてはなりません。又旅館へ對しても女子は決して我儘を言ひ、無理を通してはなりません。

旅の衣裳は略服で宜しい。然し温泉場、海水浴場等で浴衣がけ細帯などの儘で、あちらこちら訪問するなどの事は、女子は慎まねばなりません。

途中で道を問ひ、又は餘儀なく湯茶を請ふ等のことをする時は、先方がいか程卑賤の人や家でありましても、よく丁寧にして決して無禮の詞や振舞などあつてはなりません。又先方が丁寧な教へ、又は與へられ交したならば、その親切をよく謝すべく、たとひ無愛想でありましても、腹立たしくなど振舞ふは、自分が却つて非禮であると心得て耐忍すべきであります。

### 公式の禮

公式の禮は即ち君に對し、國に對する臣民の禮儀作法を云ふのでありますから、細かく述べやうとしますれば却々難かしく、且つ到底も短い言葉で盡されませぬから、茲にはまづ其の大體に就いて、心得に屬することを重に述べることに致しますから、これは猶その時その折毎に、その職の人に就いて委しくは問ひ聞くべきであります。

### 拜賀その他

拜賀の禮は、最高至尊に對し奉つて、臣民の賀を奉るのであります。最も慎むべき作法でありますから、先づ心身ともに清潔冷靜にして、定められた禮服を着用し、定められた所に参入し、係りの人の案内を待ち、姓名を呼ばるゝに従ひ進み出で、御前にむかひ一拜し、程よき所に立ち止まつて最敬禮を行ひ、その儘三歩後ろへ退いて更に一拜し、向き直つてスル／＼と退くのであります。但し場所によりまして、後ろざまに稍遠くまで退かぬばならぬ時もあります。尊者二位ならば最敬禮を行ふと直に横へスル／＼と歩みて、又其處で

最敬禮を行います。三位四位幾かたでも同じ事をして、同じやうに退けば宜いのであります。尊者は成るべく待たせ奉らぬが禮でありますから、大抵後へくと順次呼び出されるが常ですから、その前の方の成されやうを拜見して置いて、そして大抵それに習うて進退する意りで居れば安心がついて場馴れの者も過ちなくし得らるゝものであります。拜賀の衣服は、元旦又は最大禮の時はローブデコルターに裳をかけるのであります。又時としては小袖袴を用ひることもあります。が、大抵はローブデコルターを用ひます。その他査問の禮は、多くはローブモンタントであります。(二種の衣服は前述にあります) その他辭見、弔拜等もまづローブモンタントを着用する場が多いのであります。御機嫌伺ひや賜り物の御禮等に参入した時は、單に御車寄(普通玄関といふ處)に備へてあります姓名簿に、自分の姓名を記したゞけで直にお暇を申して退出して宜しい。總じて尊貴の御殿へ参つた時は、縦令自分は作法の心得がありましたしても、必ず係員に請ふて一旦り指揮を受けるが宜しい。

公民の會合

市府町村の祝賀、祭禮又は各種の事柄に於て、同市府町村の人の送迎等をする時は、餘儀ない障りの外は成るべく參會すべき義務があります。且つそれに就いて相當の出費も客ならぬ様にすべきであります。但し女子は男子と違ひ必ず參會せねばならぬ場合は左程多くもありませんまいから、その事に別れるは難かしいでせうから、その都度幹事等に問ひ聞くべきは勿論であります。右様の時參集するには、その場合に適應すべき種々の申合せもありませうが、衣服その他の物も禮儀に適ひて、決して驕奢には流れぬやうにどの注意が肝要であります。又差し過ぎて他の迷惑になつたり、嘲笑を招いたりすることのない様、且つ又餘りに引込み過ぎて、他の取扱に困却せしむる様の事もないやうに注意し、殊に式場、餘興場及び出入等の混雜に、怪我や間違のないやうに、身を慎んで輕々しい舉動のないやうにと心掛けねばなりません。又右様の場合、婦人の接待員又は幹事等に選ばれた時には、甲乙の區別なく最も親切に世話せねばなりません。

學校の諸式



學校は各自の最愛の子女をして、善良の人物とし、健康の身體とし、又文明の知識を與へさせる大切な處でありまして、即ち親が子に盡す一部分を分けて手傳うて貰ふやうな譯でありますから、成るべくその母たり姉たる人は、父兄保證人會は勿論、卒業式その他にも登校するやうにして、學校と家庭との親密を保たねばならぬものであります。殊に小學校時代は、男兒も重に母親が保護監督の許に置くものでありますから、學校の出來事は母親の必ず預るものとさへ心得べきは、ひとり學校に對する禮儀ばかりでなく、極めて子の爲めに大利益であります。

學校の開校式や卒業式に招待を受けましたらば、女學校又は小學校ならば、父親よりも寧ろ母親が行く方が宜しいのであります。いつれの會や宴でも、時間を守るべきは勿論であります。學校は殊に幼弱の子供を集めて事を行ふ處でありますから、その定時には後れぬやうに參會せねばなりません。子女に對して師たる人の講演等には、母親をづ謹聽して、子女をしてこれに習はしむるやうにすれば、この家庭に於いても長上の人を子女が謹聽するやうになるのであります。

校内に於て茶菓を供せられ、又は食事等を出される等の事がありましたならば、他の饗

宴と異なつて、歡樂を盡すためや、單に親睦を暖むるためのみでないことは云ふ迄もないのでありますから、平素我が子の訓育の勞を謝し、且つ斯る時を利用して相互の意思が通じて、子女の教育上裨益のあるやうにと注意して、談話も質問もなすべきであります。それが即ち師なる人に對する心の「ノリ」に協ふのであります。

學校の規則は、母親がまづ守つて子に及ばし、解らぬ事や心に落ちぬ事がありましたならば、遠慮なく學校に行つて解釋をも求め、意見を述べて宜しい。そして指定の通告簿その他は成るべく早く返事すべきは爲し、記すべきは記して送るが禮であります。決して通知があつても有無の返事なしに打ち捨て置く等の缺禮をしてはなりません。のみならずそれは極めて子女の教育上不利な事であり得ます。

又學校に式その他の事があつて昇降出入する時は、成るべく自分の提携品の始末をして人手を省くやうにせねばなりません。これは他の宴會等の招待を受けた場合と違ひまして子女の教育を託したる所で、子女教育が專一の目的であるのですから、その他の事に餘計の心配手数を、能ふだけ掛けぬと云ふのが、父兄側の學校に對する禮であります。

出 産

出産は、我が國では殊に然うであります。血統を貴ぶことの最も重きを置かるゝ國では、世嗣の子を擧げるのは誠に目出度いこととし、従つてその禮に於けるも極めて鄭重であつたのであります。今は普通の家では、悦びに異なることはありますまいが、作法は甚だ略されて居りますから、概略を述べることには致しませう。

着帯の祝ひは大抵妊娠後五ヶ月を以てするを普通とし、或は八ヶ月目若くは九ヶ月目に於てする禮もあります。まづ双方の父母近親等が集まつて、祝賀の小宴を開き、里方の父母からは紅白の絹各八尺づつを紙に包み、熨斗を添へ水引をかけ、樽肴と共に妊婦に贈ります。産婆はそれを妊婦の腹部に巻くのであります。産婆には祝儀として金圓を遣はします。この着帯の日は戌の日を最上の吉日としてあります。これは迷信かも知れませんが、犬は産を軽くするから此の日を選んだものと思はれます。

分 娩

分娩の時の禮は、正式にしますと産室の具は一切白色を用ひ、産婦の衣服も無論純白でいたします。それは清潔を貴ぶ衛生上から云つても、極めて善い事ではありますが、大抵のところでは左様にも行はれ難いのですから、梅の敷物、産婦の下着、生兒の着物等を、成るべく白いのを用ひるやうにしたらば宜からうと思ひます。昔の禮には種々の事があります。が、今は大抵用ひられぬこととなりました。尙ほ現今も最高尊貴の御方にては、すべて純白を用ひさせられることでもあります。

分娩から七日目を七夜と云ひます。七夜には近親中の最も幸福なる年長者に依頼して、生兒の名を選ばさせます。併しこれは父自ら選んでも差支へはありません。名を選ぶには「姓名學判斷」とか「名前の附け方」とかいふ書物がありますから、それで研究して附けますと、容易でありますし且つ氣持の好いものであります。この事は世上兎角の評もありませんが、兎に角評は評として氣持さへ宜ければ此上もない良い事でもありますから、お薦めするのであります。

名附けた名は奉書を横目録のやうに三つ折にして、その中央に書き、目録盤に載せ、樽肴と共に贈り、生兒の室に供へます。この日は醫師産婆及び近親を招いて宴を張り、生兒

の前途を祝するのでありますが、産婦がまだ肥立ちませんから、養應の間も家の内が餘りに騒がしく、また産婦や生兒に萬一聊かの手落でもあるやうでは甚だ宜しくありませんから、すべて心の「ノリ」に協ふやう務め、形の「ノリ」は第二と心得て宜しい。さて其れからは産婦への着物一重ね、里方の父母よりは生兒に初着一重ねを贈るが本儀であります。都合上略して肴又は勝男節などを祝つて置くだけでも苦しくありません。

### 宮参り

宮詣りは、大抵産後から百二十日目に鎮守の神社、即ち生兒の氏神に詣でさせるのであります。また長い御あたりでは、五十日目に祖宗の御神を齋ぎ祭らせたまふ賢所に参拜あらせ給ふ例であります。客参りの作法は何方も區々であります。兎も角も上の行はせ給ふ敬神の禮儀に協ふもので、これを爲すは甚だ宜しいことでもあります。

### 食ひぞめ

これも矢張り百二十日目に至つて、生兒のために新たに食事の膳部を作り、これを生兒

に薦めて箸をとらせる形式を行ふのであります。それは母親がすべて箸をとつて式を行ふのであります。この日近親を招いて養應をすること、大抵七夜の時に準じて宜しいが、それよりは少し手輕にするが普通であります。

### その他の祝賀

この他三歳の髪置の祝ひ、男兒五歳の袴着の祝ひ、女兒七歳の攝取着初め及び男兒の元服、女兒の齒黒めの祝ひ等は、近い頃まで行はれた禮で、またそれより以前には男女兒とも三歳で袴着の祝ひ、それからは男兒の加冠、女兒の衣裳着等の祝ひがありまして、禮式も甚だ嚴かであつたやうであります。今は大抵すべて廢れたやうではあります。三歳の祝ひは、たゞ何となく行はるゝむきもありません。

### 年賀

年賀は、四十賀を初老と云ひ、これから初めて五十賀、六十一賀(還暦)七十賀、七十七賀(喜の字祝ひ)八十賀、八十八賀(米の祝ひ)九十賀など、祝ふことがありますが、今は大

抵六十一賀などから祝ふやうであります。

六十一賀は「還暦」として、老人が再び子供に還るの意味で、これから更に赤色の衣服や装飾を用ひるのであります。それ故この祝賀には、その子また孫などが集まつて、男子へならば絛裏の羽織、外套又は絛の袴など、女子へならば絛の掻取又は羽織などを贈ります。そして骨肉の年少者又は弟子などから賀宴を張つて、老人を招するのであります。また賀宴を鄭重にすれば、六十一賀ならば總てその數だけ作り、屏風や器具やその他皆賀意を加へた意匠を懲らすことでもあります。又祝ひを受けた老人からは、自筆の扇面とか短冊、色紙とか或は自詠の詩歌、自書又はその意味を染め出した袷紗などを挨拶として贈ることでもあります。

七十賀も大抵前に準じ、たゞ特に還暦の意を表するものを省くだけであります。但し七十賀は古稀の賀と稱して、その高齡に達したのを悦び祝ふのであります。

七十七、すなはち喜の字の賀も大抵前同様で、且つ老人から「喜」の字を物に記したり染めたりして祝ふた人々に贈る等のことをするまであります。

八十賀も大抵七十賀と同様であります。

八十八は米壽で、最早この年齡に達する人は、餘り多くありませんから、親戚朋友なども殊にその高齡にあやかりたいなど、云ふものでありますから、幸ひに老人が健かであつたり、疲れを感せぬ限り、何なりとも揮毫を請ふも宜しいでせうが、然し極老のことでもありますから能く注意すべきであります。米壽とは七十七を組み合せば「喜」といふ字になるところから喜の字の祝いと云ふやうに、八十八を組み合せば米となりますから、米壽と云ふたのであるとの事ですが、世俗には老人の爲めに竹の杖を切り、それで升に入れた米の上部をズツと摺つて、その米をあやる様にと、人々に分つなどの式をする人もあります。

九十賀は殊に珍らしいのでありますから、いづれも親戚朋友が集まつて賑々しく賀宴を開くのであります。すべて慶應は前に述べた通りを斟酌し、何れもみな賀意を加ふべきであります。

賀宴は、一體孝子慈孫が我が父母、祖父母等の恙なくて高齡に達せられたことを悦んでその爲めに賀を奉り、そして猶この上とも親たちの壽命あらんことを祈り、且つその心を慰めやうとの意から出たものでありますから、若しもそれが常に却つて老人に心づかひ

をさせたり、又は疲れを覚えさせたりするのは、もとの主旨と違ふことになりすから、能く注意して不都合不敬のないやうにすべきであります。  
また餘りに子や孫や弟子が、親や師を悦ばせたいと思ひ、或は十分盛大にして折角催した甲斐のあるやうにとの心から、縁も由縁もない人にまで、強ひて詩歌等の揮毫を請ひ、または會などの催しに會費を献誘する等のことは、却つて餘命少ない老人のためには、迷惑を感ぜらるゝのでありませうから、能くそれらの點に注意して、すべての事を取扱ふべきであります。

### 葬 祭

凡そ人と人との交際上、吉凶禍福互ひ／＼に相訪ふのが禮の主旨であります。吉事に己むことを得ずば、寧ろ禮の疎かなことがあつても、凶事には大抵の事を排して能ふべきだけ同情を寄せなければなりません。況して近親々友の喪には、ことに／＼心の「ノリ」の正しく、深く道徳の域に入るやうにあることが望ましいのであります。

### 忌 服

國民の慎んで服すべき大喪は大抵一ケ年で、第一期第二期第三期等にわかれて居ります。音楽停止の期間、喪服の規定等すべてその都度御達しがありますから、能くこれを遵奉して國民たるの徳義を全ふすべきであります。

これに亞いで慎み勉むべきもの、且又近接の義務上に於ては、特に疎かなるまじき父母夫の喪は忌五十日、服十三ヶ月であります。この間は慎んで哀悼の情を盡すべく、よし官職の多忙なるため、短期日で除服出仕を命ぜられたり、業務多忙の爲めに早く仕事に取掛らねばならぬ人でありましても、それは單にその己むを得ぬ職掌だけは平素のやうに務め、あとは總て忌中の通りの心得であらねばなりません。

父方の祖父母及び夫の父母(舅姑)は忌三十日服百五十日、母方の祖父母、父母の伯叔父母、兄弟姉妹、妻及び嫡子は皆すべて忌二十日服九十日、母方の伯叔父母、嫡孫は忌十日服三十日であつて、従兄弟従姉妹は忌三日服七日であります。そして七歳未満の者は男女ともに忌服はうけぬのであります。

訃音、弔詞

近親の不幸に際しては、誰れも愁傷に取り紛れ、且つ大抵は人をして爲さしめます故にその報知も落ちたり、又は二重になつたりするものでありますが、成るべく強ひても心を落ちつけて、能ふべきだけ通知洩れのないやうにすべきであります。又通知を受くべき方に於ては、よしや假りに誤つて通知洩れなどした時でも、先方の混雜愁傷に同情して、決して不平を鳴らす等のことのないやうにすべきであります。

大患者が危篤に陥つたならば、その近親及び特別の縁故ある人の許へは、まづ危篤の通知をしなければなりません。さて危篤の通知を受けた人は、成るべく萬障を差し繰つて訪問すべく、若しも病氣どか、他國に行つてゐるとか、自身に行くことが出来ぬ場合などであつたならば、速かに己れの代人を遣はして、懇篤にその状態を問ひ、手助けの出来る事は成るべくするが宜いのであります。

死去通知狀(其一)

父謹儀、永々病氣の處藥石其の効無く昨夜何時何分死去いたし候。右御知らせの爲め如

斯に御座候。

追而葬式は来る何月何日午後一時自宅出棺何町何々寺に埋葬いたし候。

同(其二)

既に端書にて御知らせ申し上げ候通り父事去る何日午前何時頃遂に永眠いたし候豫て諦め居り候事ながら臨終の際には何とも言はれぬ切なさを感じ候。殊にこれ迄家事一切を取りまかなひ居りし人の亡くなり候事として一同途方に昏れ申し候。病の基は永らく健康を害し居り候處へ餘病を併發して遂に今度の不幸を見るに至りたる次第に候。尤も初めは経過も宜しく醫師も心配に及ばずと申し候程にて私達も安堵いたし居り候處程なく回復覺束なき容體に急變し看護怠らざるに此の不幸に遭ひ候次第愚衷御惻察下され度候さて父存生中は一方ならぬ御厚情を蒙り候段深く御禮申上げ候これよりは私共若年無經驗の身を以て一家維持の任に當らねばならず何卒萬事につけ御心添へ下されたく折入つてお願ひ申上げ候右御知らせ旁々御願ひまで如此に御座候 敬具

前のは普通の通知手紙でありまして、後のは遠方の人に知らせる手紙であります。一體この通知狀は簡單なものでありまして、唯その時の経過を述べればよい位のものでありま

す。併し反對にこれを弔慰する事になりますと、幾らか複雑して参り申す。これは禮儀を正しく書かねばなりません。この内容は見舞の手紙と頗る似てゐて、只悔み状は一層哀傷的に書き、冒頭の敬辭や時候の挨拶は省くのであります。

悔み状(其一)

御訃音拜讀たゞ驚き入り申候近來は大御無沙汰にて御病氣の事も存じ申さず日頃御壯健とのみ存じ居り候ひしに急に御變り遊ばされ候御事何とも申上げやうも御座なく御一同様の御落膽御愁傷さこそと恐察奉り候併しながら返らぬことは致方なく御嘆きの餘り皆々様御病氣など御惹起しあそばされ候ては却つて御亡父様の御意にも叶はせらるまじくと存じ候間吳々も御注意御加養の程祈り上げ奉り候早速参上の意りに御座候處少々腫物にて立居難儀に御座候間取りあへず紙上を以て御悔み申上げ候。

御香奠一包、茶飯三重輕少なから進上只お印ばかりに御座候。謹言。

同(其二)

御母堂様御逝去の由承はり驚き入り候。大兄始め御一同様の御愁傷察し入り奉り候遠地にて御會葬も心に任せず失禮御許し下されたく候別封些少なから御靈前へ御供へ下

され候はゞ本懐の至りに御座候。

死去報知の書状は鼠色の紙を用ひるのが從來の禮であります。近來は大抵西洋風に習つて状紙も状袋も、白紙に黒色の縁をとるのであります。通知書に書く姓名は、正式に云へば宗族の代理者及び死者の親友等の名を以てし、寧ろ大喪に居る妻や子は記さぬが古例でありまして、それは慎んで喪を受くるの意、すなはち孝道を殊に貴ぶ家族の美風から云へば、その方が宜しいやうであります。一體禮法と云ふものは、すべて習慣の力を加味して作製せらるゝことが多いのでありますから、唯今の一般の風俗に従つて最近親者の姓名を記しても決して非禮ではあるまいと思はれます。それも時機に従ふべきであります。

悔みの書状も從來は鼠色の用紙に記して送つたのであります。近來は左様な事をする人は少なくなりました。けれども唯返しがきをせず、袋を押返して封筒に入れぬ等の注意を要するのであります。

近親の不幸には、遠方の所でなければ、まづ危篤の報を得ば直に行かなければならず、又死去に接した時は、衣服を改めて更にそれ〴〵喪に籠る用意をなすべきも、最近親でな

い親戚及び友人であつては、その通知を得たならば速かに行つて、丁寧懇篤に深き同情を以て弔詞を述べなければなりません。

### 葬儀

家内の者に亡くなられた場合皆さんは、悲嘆と恐怖でそれこそ爲す術も知らない位に感ふであります。こんな事はさう度々あるべき事ではなく、先づ何事をしたら好いかと思ひ感ふことでもありますから、その手順を述べることに致しませう。

それは何事を指しても第一番に必要なものは醫師の診断書であります。診断書を買つて區役所とか、田舎なら役場へ行つて死亡届をし、埋葬書を買つて今度は警察へ行つて其の旨を届けます。それで宜いとなれば、其の埋葬書は火葬場へ行くとか、寺院へ送るまでは大切に持つて居ります。

一方は葬儀社へ行つて總ての取極めをしす。そして其の足で菩提寺へ行つて委細を頼みます。すると住職は其の約束に依つて宜しく取計うて呉れます。

最も近しい骨肉の葬儀は出来るだけ鄭重にしなければなりません。然し、儀式行装のみ

盛んであつて、却つて哀悼の情の薄いのは甚だ嫌ふべき次第であります。これは全く容の「ノリ」にのみ重きを置いて、心の「ノリ」を外にしたのであります。かうした事は心ある人の爲さざるところであると云ふことを、能く／＼思はねばなりません。

さて葬儀には、まづ心利きたる者を選んで儀式係とし、尙ほ會葬者の受附、墓地の注意及び順序等をよく定め、すべて洩れなく取り整はしめ、式は莊嚴にして而も迅速に事を運ぶやうにし、加勢人その他の空暇等を感せぬやうにし、又雨天などなれば、殊に會葬人の困難混雑を來たさぬやう、すべての注意か肝要であります。

さて最親喪者は神葬なれば誄(俗にのり)佛式なれば讀經の終つた時、係員の報知によつて席を離れ、玉串を捧げ、又は焼香を爲し、さて次々に會葬者の拜禮等が済んで、それ等の人々が退散の時出口に立つて一々無言のまゝ禮を施し、式場係上席の人は簡單に會葬の禮辭を言ひ、こゝで大概は歸途に就き、近親と親友等が埋葬に従ふのであります。

尤も近頃は火葬にするのが多くなり立したから、この場合には寺院とか自宅で告別式を舉行し、そして火葬場へ行きます。この告別式は、前述の通りを行ふものでありますからその心であれば大差はありません。



諸藝の心得

婦人の日常學ぶべき禮式には、半ば技藝に屬するものが多いのであります。すなはち技藝の中に禮儀あり、禮儀の中に技藝を含み、これに通せざれば婦人の面目を全くすること能はざるものと云うてあります。斯の如く婦人の藝は誠に大切なるものであります。

作文について

人間の他の禽獸の類に優り、萬物の靈長と稱へられる所以は言語、又は文字を用ひて、其の心に思ふ事を他の人に傳ふることを得るに由るからであります。言語なれば唯だ眼の前に面を見合せ居る人と語るのみですが、文字なれば千萬里の遠きを隔て、も心の底を打明けて語り合ふことを得べく、世にこれ程重寶なるものはありません。けれども其の文字によつて心に思ふ事を寫し、他人に示す中にも平日最も用の多いのは手紙を書くことでありす。然るに其の手紙に用ふる文章に拙なき時は、我が思ふことを先方に通ずることが出来ません。故に手紙の文章を習ふことは甚だ大切な事なのであります。

昔の人は、書は姓名を記すを得れば足れりなぞと云ひましたが、文章のみ巧くても筆蹟が拙なかつたら、先方に讀み難きか又は假令讀むことが出来ても、其の筆の蹟は恰も鳥の踏みちらしたやうに、いと醜き時は、其の人品の何となく賤しく見らるゝものであります。故に唯だ文章を練るばかりでなく、筆蹟も優に美しからんことを望むものであります。さて筆の蹟の美しからんことを欲せば、手習をするの外はありません。手習して文字を美しく書かうとするには、先づ手本について學ぶべく、その手本に對しては第一に筆立てに心を付けます。字の形ばかり似せたどて詮方ありません。また粗末に書いた手蹟を手本として習ふことは見合せなければなりません。手本が粗末なれば、それに心が移つて習ふにも籠略になるものであります。たゞ筆さきに心をつけ、筆意を専らにします。筆をとるには指を強くなくし、心を筆より先に餘るやうに持つて書く時は、文字の形に勢ひがありません。兎角心をおうやうに、ゆう／＼として筆先に心をつけ、文字は心よりも後に置くと心得ます。此の文字を書かうと思はゞ、先づ其字を心に浮べて後筆を立つべし。筆を執る法は、指を確かにし、手の内に卵子を入れた心持にしす。筆あたりの事は紙にまかせてしなへた心で書きます。紙の肌はいろ／＼あるものですから、其の紙の心に逆らはぬやう

に書きます。筆勢の木に入り岩に通つたといふことも、必ずしも其の理由のないといふことはありませぬ。  
 又墨の摺りやうも注意せねばなりません。墨が悪ければねばり、紙あたり悪しく、墨つきかすり切れるのであります。墨を摺ることは、たゞ柔かに手を止めず、おだやかに長く摺るのであります。

文章の書き方

文章は能く先方の身分を考へて相當な言葉を用ひねばなりません。敬ふべき人に簡略な文章を用ふるも無禮、又さもなき人に餘り結構過ぎた文體を用ふるは、先方を愚弄するやうで宜しくありません。これ等は能わきまへる事が肝要であります。

文章中にかへすくなど書くことは祝儀のことで、即ち本文に書いた事を繰返して言ふのであります。けれども婚禮の文には、なほく、かへすく、重ねく、芽出度くなどの言を書くことは可けません、婚禮には嫁の里方へ歸るといふことを甚だ忌むからであります。又弔文にも、なほく、かへすくなど書いては可けません。これも不幸な事の重ね

てあるを忌むからで、總て酒肴菓子類又は重の内などを送る時の文體は、先づ何々の御祝ひ御よろこび申上げ候はん爲め、文を進じ候などと書き、次に何々の品進じ候由を書きます。或は御見舞のため何々を進上いたし候などと書くことを多く見ますが、本義ではありませぬ。文を遣はすことを専一と心得なければ可けません。何々の爲め文を遣はし候ゆゑとりあへず肴菓子など送り候由を云ひ遣はすと心得なければなりません。又返事にも何の品御祝ひと仰せられ、しめし預り殊に珍らしき品物送り給はり、なごせなければなりません。すべて祝儀などの時自身行つて祝ひを言ふべき事敬ひであります。自ら行き難きとき、自筆に文を認め使を以て悦びを述べるので、酒肴など送ること、自身行つても又は文を遣はしても、其の口上又は文で慶辭を述べるので、酒肴で祝儀を言ふのではありませぬから注意を要します。

女の文は如何にも優しくせねばなりません。文はことばを聲につかはす讀みに替へるものであります。たとへば昨日を昨日といふ如く、さくじつは聲できのふは讀みです。今日をけふ、一昨日をとつひなどと使ふは讀みです。書物なども此の心で讀むべきであります。墨つぎにも濃く書くは敬ひであります。けれども餘りに濃いのは賤しく、されば程を

見計らはねばなりません。

文字くだりは、句切りよくせねば可けません。上へ付くべき字を下へ付けて書くことも悪く、たとへば見事の御さかな送り下されなどと書く時、見事の御さかなとさかを上下に分けて書くこと悪し、御さかなと続けなければ可けません。又一とひはたまさかの御出でに候へどもを、ひとひはたまさかと、斯様の所で句切り、又墨つぐなどはあしき事でありませぬ。

貴き人の名を書くか、又は其の文の中で第一に言ひ遣る事などは墨をつくべきでありませぬ。その外つぎ行の上にあけて書かぬ字は、かの字の、字などで、これは初めに言ひたる言葉につゞきたることですから、その行で書き果すべきであります。若し下が詰つて書かれなければ、その行で書き果します。譬へば何の事まことに御座候やは、御座よりあげて書くのであります。

文字の姿を優しく書かうとて、いろ／＼にやつし散らして読み分け難きは無禮となりませぬ。また点ひき、捨てはねなど餘り長々と書いては可けません。亦文章を優しく書かうとして、餘りに分らぬ事を書き並べるのは、物議り立てに読み難くなつて無禮であります。

けれども又今様の流行語など成るべく書かぬ事であります。

懇ろの言葉を書く事は、差向ひで言ふよりも筆に言はる方が言ひよいものですから、誰も書くことですが、然し、常にその人との挨拶から文で睦まじきは、偽りが外に現はれて心根つたなく、遊女らしい、これは慎むべき事であります。

文の法はさまざまありますけれども、女はさのみ細かに書く事を正しく言はずとも、落度にはならぬものであります。けれども第一祝儀の文には、なほ／＼懇ろに書くが宜い。旅先又は遠國へ遣はす文は、封じ目を解いても先の名もわが名も切れぬやうに封じて書き文す。

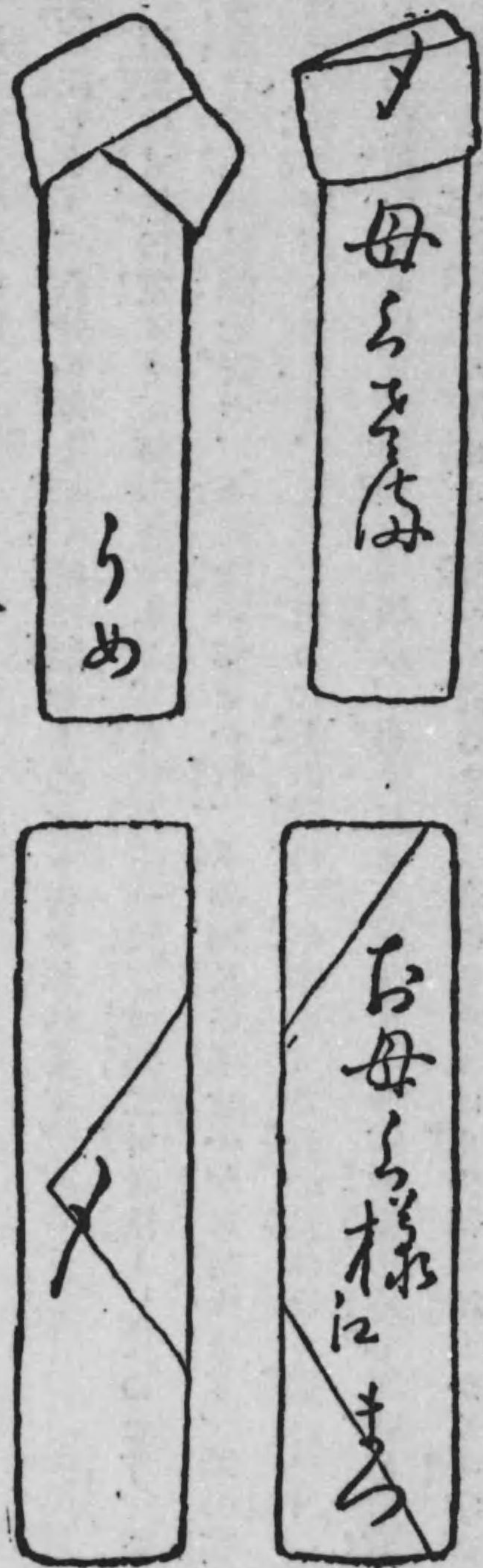
敬ひの方へは披き文なるべく、名宛は先の召遣はるゝ人にし、留めは此の由宜しく御披置頼みまわらせ候とか、此の由よきに御執做しとか、又は御申上げ下さるべく候とか、或は御中様へめでたくかしくとかあるべし。

用文は墨薄くかすり、第二行目に四字かすつて書くべし。文體は短くザツと書いて、重ね言葉の無いやうに心掛け文す。又裏へは無し。然し遠方ならば格別です。又用文は普通には返事せぬもので、これも遠き所の人へは有つても差支へありませぬ。

總て文を書くは詞の代りに用ふるもので、人々目前に逢ふ時は詞で物語るも、離れて用のある時は、文に書いて思ふ心を彼方に通はす事なれば、我が思ふ心を彼方に能く分るやうに書くを第一とします。僅かの用を長々と書き続け、徒言の多いのは讀むにも煩はしければ、成るべく贅言を省き、簡短ならんことを心掛けねばなりません。その書いた文字の明かに讀めなければ、我が思ふ事が彼方に通せぬものですから、簡單と云つても先づ第一に讀み易く書かねばなりません。但し此事は、主として俗川文の上にいふ事で、雅事の文は詞を優美に飾つて書かねばなりません。例へば用事あつて物語る時は詞少なく手短かに語り、雅事は事の起原又は比譬をひきて細かに語るの類であります。その外日用の書簡文または規則正しき證據となるべく文書の例といろくあります、それは追て掲げること致します。

文の封じ様及び認め方

手紙の封じ様は、今は普通に状袋に入れることになりましたが、若し状袋に入れずして封じ様とするならば、結び封じにするが宜しい。



圖の如く手紙の先方の名宛の脇へ書き加へるを脇付と云ひ、これは貴賤に限らず必ず書き加ふべきものです。先方の人の身分によつて同じではありません。古くからの例によれば、最上には、「進上」と右の肩に書き、名の左方に「参る人々御中」と書き、直接に先方の人に宛てずして、取次の人々中へ遣はす意味を表はし、中の上なるは「人々御中」と書き、普通の場合同輩へは「様御許へ」と記し、下輩へは「どの参る」と書きます。

けれども、今は郵便といふ便利な文明の交通機關が備はり、三錢の切手一枚を貼れば何處までも自由に通信することが出来、随つて配達に便利なやう、手紙の上書は成るべ

く分り易く、差山人と受取人の住所姓名を記すことが肝要であります。

### 色紙短冊詠草の書き方

色紙は古代には一種の紙の名でした。けれども今の世に色紙と云ふは、歌書く紙のみ色紙といふやうになりました。この色紙の寸法は竪六寸四分幅五寸六分が普通で、近頃は大分形も變つて参りました。

色紙の書き方は別に定りとしてありませんが、墨つぎは初句三の句五の句とし姓は少し薄き墨で書き、名は濃き墨で書きます。古人の歌を書く時には、おもてに我が名を記さず、裏に記します。自分の歌を書く時は題をも名をも書き加へます。

短冊は寸法に定りとしてありませんが、今は長さ一尺二寸幅二寸を法としてゐます。その書式は、上には題を書き、下に上の句を一行、下の句及び名を一行に書きます。歌の高さは三ツ折半字が、とりとて、三つに折つた上の折目に半字かゝる程の高さより書きます。但し三つに折つて書いては短冊をも損ひ、書くにも不便ですから、唯其の心して書けば宜しい。そして上の句下の句高さを揃へて書きます。名の止まりは上の句を終りから半字ばかり

り下るやうに書きます。題は三字題までは一行に書き下し、四字題からは上は二行にわつて書きます。但し熟字を切つてはなりません。假名題、假名句題は散らして書きます。詞書の題もちらして書きます。長き時はわりこみて細かく書いても差支ありません。

墨つぎは初句、三の句、五の句でつぎます。四の句は墨かれて書きます。上の句下の句の頭字ともに漢字なるは見様悪しくしてゐるし、雲形の短冊は青き雲を上とし、紫の雲を下とします。追憶懐舊などには紫を上とする事もあります。金泥など散らしたる短冊の上下ともに明いたのは、多く明いた方を上にして書きます。

婦人の短冊は、古くは下の句の頭字を一字下げ、名を裏に書きましたが、今は多く男ど同じ様に書くやうになりました。題の上はいさゝか明けます。名の下も少し明け、餘り上又は下によりたるは見苦しいものです。又二行をあまりに寄せ、又あまりに離して書くのも宜しくありません。

詠草には竪詠草と折詠草との二様があります。竪詠草の料紙は多く小奉書、杉原を用ひ折りやうは二つに折つたのを又五つに内へ折ります。その五行の初めに名を書き、次に題を一行に書き下し、次に上の句を一行、下の句を一行に書き、一行と半枚を白く明けて置

くのです。墨つぎは短冊に同じ。又二首書くこともあります。然ういふ時は三行目の中に一首を二行に細かに書き、四行目は又一首書くのであります。

折詠草は會席の折師に添削を乞ふための詠草です。料紙は杉原美濃紙などを用ひます。また大半紙半紙を用ふるも妨げありません。其の折り様は紙を重ねて横に二つに折り。また壁に四つに折り、初めの折目の隅に名を記します。男は名の右に女は名の左に上といふ字を書きます。これは師に見せて添削を乞ふものですからであります。

# 日本婚禮式（一般禮式）終

昭和二年十二月二日印刷 昭和二年十二月六日發行		日本婚禮式 定價金壹圓六拾錢 送料金十錢	
		著者	小 平 久 馬
		發行者	東京市神田區表神保町三番地 伊 藤 巳 之 助
印刷所		印刷者	東京市小石川區戸崎町九四番地 澁 木 理 三 郎
東京市神田區表神保町三番地		印刷所	東京市小石川區戸崎町九四番地 中央印刷株式會社
發行所		東京市神田區表神保町三番地 泰 文 館 書 店	
		總發行所 東京六七六〇三番	



558  
182



